帝国主義戦争と社会主義者

キーンタールにおける第二回国際社会主義者会議＊　1916 年 4 月 11 ～ 17(24 ～ 30)日

＊第二回国際社会主義者会議とは　　事項訳注　P669

1916 年 4 月 24 ― 30 日のキーンタール（スイス）会議のこと。十カ国から四三名の代議員が出席した。議事日程にのぼった問題は、（一）戦争をおわらせるための闘争、（二）プロレタリアートの平和問題にたいする態度、（三）宣伝と扇動、（四）議会活動、（五）大衆闘争、（六）国際社会主義ビューローの招集。

レーニンとボリシェヴィキの会議前の活動の結果、会議では左派はツィンメルヴァルド会議のときよりも強固であった。ツィンメルヴァルド左翼は、平和問題についての決議草案を作成して、会議に提出した。これにはレーニンの基本命題がはいっていた。キーンタール会議は、帝国主義戦争の内乱への転化、自国政府の敗北、第三インタナショナルの招集というボリシェヴィキのスローガンを採択しはしなかったが、国際主義的分子の分離と結集を促進した。レーニンは、この会議を一歩前進と評価した。

本巻に最初の文案をおさめた『ロシア社会民主労働党中央委員会の提案』の本文は、本全集、第 22 巻、196 ～ 205 ページに印刷してある。なお、本全集、第 36 巻 445 ～ 454 ページを参照。

I.S.K(国際社会主義委員会)とは

ツィンメルヴァルド連合の執行機関、ツィンメルヴァルド会議で設置された。委員会には、中央派のグリム、O・モルガリ、Ch.ネーヌがはいり、通訳としてバラバノヴァがはいった。

注）……は本文中の表記、……は青山の略

一　ロシア社会民主労働党中央委員会の提案の最初の案文

……

Ｉ・Ｓ・Ｋは、諸組織にたいしてこれらの問題を討議し、それぞれの提案を送付するよう要請した。以下は、この要請にたいするわが党中央委員会の回答である。

一　すべての戦争は、交戦国とその支配階級が戦争前に、多年のあいだ、ときには数十年のあいだおこなってきた政治の暴力的な手段による継続にすぎないが、それと同様に、どの戦争を終結させる講和も、その戦争の結果として達成された、力の現実の変化を考慮し記録したものでしかありえない。

二　したがって、防衛と攻撃という「単純な」概念をもとにして現在の戦争の評価をうんぬんし、また永続的な、民主的な、名誉ある、等々の講和についての「単純な」敬虔な願望をもとにして将来の講和の評価をうんぬんする論議はみな、理論の見地、社会主義の学説の見地からすれば、最大の愚論であり、愚鈍であり、実践的には労働者階級をこのうえもなく欺瞞するものである。

三　現在の戦争は帝国主義戦争である。すなわち、高度に発展した、社会主義に移行するまでに成熟した独占資本主義を基盤とする諸矛盾によって生みだされた戦争である。この戦争は、世界制覇のために、すなわち弱小民族の新たな抑圧、世界の新たな分割、植民地・勢力圏等々の分割――そのばあい、旧来の略奪強国のイギリス、フランス、ロシアが、若い、より強力な略奪強国のドイツに獲物の分けまえを譲り渡すことになるような分割―

―のためにおこなわれている。

四　したがって、プロレタリアートの革命が、交戦諸「大」国の現在の政府と現在の支配階級を打倒しなければ、帝国主義列強間の多少とも短期間の休戦のほかには、どのような講和も絶対に不可能である。それは諸国家の内部における反動の強化、弱小民族の民族的抑圧と隷属の強化、新しい戦争を準備する可燃物の増加等々をともなう講和である。なぜなら、帝国主義の時代全体によって生みだされている政策、そして交戦中のすべての「大」国のブルジョアジーが現在の戦争の以前にも、またそのあいだにも、遂行してきた政策の客観的な内容からは、民族の新しい、より悪質な抑圧等々にもとづく講和が不可避的に生じてくるからである。

五　公認の社会主義諸党の大多数がしているように、諸国の現在の政府や現在の支配階級（すなわち地主と同盟したブルジョアジー）のあいだに永続的、民主主義的、等々の講和が可能であるという考えまたは期待を、人民大衆のあいだにおこさせることは、人民を恥しらずにも欺くことを意味するばかりでなく、人民を眠りこませ、ストライキ運動や示威運動のかたちで事実上すでに始まっている革命的闘争から彼らをそらせることをも意味している。

六　オランダ社会民主労働党のアルンヘム大会における第二インタナショナルの公認の代表ユイスマンスも、第二インタナショナルのもっとも有力な理論家であり、あらゆる国の社会愛国主義者と社会排外主義者のもっとも有力な擁護者であるカウツキーも、いま「一致して」かかげている「講和綱領」は、まさに人民をこのように欺瞞し、プロレタリアートを革命的闘争からそらせるものである。彼らの綱領は、併合と賠償金の否認、民族自決、対外政策の民主化、国家間の紛争を審判するための仲裁裁判所、軍備撤廃、ヨーロッパ合衆国等々といういくつかの民主主義的な善意の願望を、口先だけで偽善的に承認することである。

七　この「講和綱領」が徹頭徹尾偽善であるということを示すもっとも明白な証拠は、一方では、交戦国のいくたのブルジョア平和主義者とデマゴーグ的大臣たちがそれを口先で承認していることであり、他方では、交戦国の一方のグループのロンドン「社会主義者」会議（1915 年 2 月*）と、反対側のグループの「社会主義者」のウィーン会議（1915 年 4 月**）で名うての（notorisch）排外主義者たちがそれを繰り返したことである。略奪戦争をおこなっているブルジョア内閣にはいる「社会主義者」こそ、軍事公債に賛成投票したのであり、さまざまな団体や機関、等々へ参加することによって戦争を助けたのであるが、新旧の併合、植民地抑圧その他を擁護する政策を実際に遂行しているほかならぬ彼らが、併合の否認等々をかかげた彼らの「講和綱領」を全世界にむかって提唱しているのである。

＊「三国協商」諸国社会主義者ロンドン会議　　事項訳注　P670

1915 年 2 月 14 日、ロンドンでひらかれた。会議に参加したのは、イギリス、フランス、ベルギー、ロシアの社会排外主義者や平和主義者のグループの代表者、すなわち、独立労働党、イギリス社会党、労働党、フェビアン協会、フランス社会党、労働総同盟、ベルギー社会党、エス・エル、メンシェヴィキの各代表者であった。議題は、（一）諸国民の権利、（二）植民地、（三）将来の平和の保障であった。

ボリシェヴィキは会議に招待されなかったが、レーニンの依頼でエム・エム・リトヴィーノフが会議に出席して、党中央委員会の宣言を読みあげた。宣言は、社会主義者のブルジョア政府からの脱退、帝

国主義者との完全な決裂、協力の拒否、帝国主義政府の非難、軍事公債賛成の非難を要求していた。朗読は中断され、発言を禁止されたので、リトヴィーノフは、テキストを議長団にわたして、退場した。

ロンドン会議については、レーニンの論文『ロンドン会議について』、『ロンドン会議にかんして』（本全集、第 21 巻、125 ～ 127、170 ～ 172 ページ）を参照。

＊＊　1915 年にウィーンでひらかれたドイツとオーストリアの社会主義者会議をさす。この会議は、前注のロンドン会議へのいわば回答で、帝国主義戦争における「祖国擁護」という社会排外主義的スローガンを承認した。

八　第二インタナショナルの最大の権威であるカウツキーは、1915 年 5 月 21 日に（『ノイエ・ツァイト』）全世界にむかって、ロンドン（1）とウィーンで「社会主義者」が民族の「自立」あるいは自決の原則についてこのように同意し、「意見が一致」したことは、「講和綱領」についての第二インタナショナルの「意見の一致」と「生活力」を証明するものである、と公言した。ところが、このうえなく目にあまる、図々しい偽善と労働者欺瞞とをこのように擁護し、承認することは、けっして偶然ではなく、口先では「国際主義者」を装いながら、実際には、「祖国擁護」の思想を帝国主義戦争に適用してこれを美化し、社会主義を裏切った社会排外主義者との「統一」を説くことによって、労働運動にたいする社会排外主義者の支配を強化している人々がいくたの国でおこなっている系統的な政策である。労働者階級にとってもっとも有害で危険な、この政策をおこなっているのは、ドイツではカウツキー、ハーゼその他、フランスではロンゲ、プレスマヌその他、イギリスでは指導者の大多数、ロシアではアクセリロード、マルトフ、チヘイゼ一派、イタリアではトレーヴェスその他である（「ツィンメルヴァルド連合ともっとも新しいインタナショナルとをめざしている党指導部とオッディーノ・モルガリの行動を妨げるために、あらゆる手段をもちいたのはだれであったか」暴露するぞとトレーヴェスその他の「ポシビリスト*派改良主義者」をおどかした 1916 年 3 月 5 日付のイタリアの党中央機関紙『アヴァンティ！』を見よ）。労働者階級にとってもっとも危険なこの世界政策は、そのもっとも権威ある代表者の名まえにちなんでカウツキー主義的政策と呼ぶことができよう。

＊　**ポシビリスト**――フランス社会主義運動内の小ブルジョア的・改良主義的潮流。労働者の闘争を「可能な」（ポシブル）わくにかぎろうとした。

(1) 手稿では、コペンハーゲンと誤記されている。

九　社会主義者は、改良のための闘争を拒むわけではない。とりわけ、彼らは、議会のなかでも、たとえとるに足りないものにせよ大衆の状態をよくすることにはなんにでも賛成しなければならない。たとえば荒廃した地方の住民への補助金をふやし、民族的抑圧を軽くすることなどに賛成して投票しなければならない。しかし、現在の戦争とそれから生まれてくる講和を基盤としては、大衆の状態をよくしようとするこの種の改良主義的活動は、ごくわずかな程度でしか可能でないことは、明白である。現在の戦争によって提起された諸問題が改良主義的に解決できるという考えを、直接あるいは間接に大衆におこさせるならば、それは、はなはだしく彼らを欺瞞するものであろう。なぜなら、この戦争は、ヨーロッパに革命的情勢をつくりだし、帝国主義のもっとも根本的な諸問題を日程にのぼせているが、これらの問題は、ヨーロッパの現在の諸政府と支配階級が革命的に打倒されるばあいを除けば、帝国主義的に解決するよりほかはないからである。だから、永続的な

民主的講和をめざしてたたかう社会主義者の主要な基本的任務は、第一に、革命的大衆闘争の必要を大衆に説明し、それを系統的に宣伝し、それに適した組織をつくること、第二に、講和についての、また「講和綱領」の問題で第二インタナショナルの「意見が一致」しているというブルジョア平和主義的な文句も、社会主義的な、とくにカウツキー主義的な文句も、偽善であり、偽りであることを暴露することでなければならない。社会主義をめざしてこの帝国主義戦争を内乱に転化する可能性を、ブルジョアジーの尻馬にのって否定し、これをめざすあらゆる革命的活動に反対している「社会主義者」の口にするこういう文句は、二重に偽善的である。

一〇　「講和綱領」にかんしてこんにち支配的になっている偽善の中心点は、新旧の併合にたいする闘争を一致して認めると称していることである。しかし、併合とそれにたいする闘争を口にするものが、たいていは、併合とはなにかを考えてみる力がないか、さもなければ、考えてみようと思わないのである。「他国」の領土を編入することをすべて併合と呼びえないことは、明らかである。なぜなら、社会主義者は、一般的にいえば、民族間の境界の撤去、諸民族の接近と融合、より大きな国家の形成に共鳴しているからである。status　quo〔現状〕の侵害をすべて併合と見なすわけにいかないことは、明らかである。それは、もっとも反動的なことであり、歴史科学の基本概念を嘲笑するものであろう。暴力的、軍事的編入をすべて併合と見なすわけにいかないことは、明らかである。なぜなら、暴力が住民大衆のため、人類の進歩のために行使されるならば、社会主義者は、暴力に反対することはできないからである。併合と見なすことができるし、またそう見なさなければならないのは、住民の意思にそむいた領土の編入だけであることは、明らかである。言いかえれば、併合という概念は、民族自決の概念に不可分に結びついているのである。

一一　ほかならぬ現在の戦争を基盤として――この戦争が両交戦国グループのどちらについてみても帝国主義戦争であるために――、敵国が併合をおこなったばあい、あるいはおこなっているばあい、ブルジョアジーと社会排外主義者が「併合」と激しく「たたかう」という現象が、生じないわけにはいかなかったし、また実際に生じたのである。ジューデクムとオーストリアやドイツの彼の友人と擁護者――ハーゼとカウツキーをもふくむ――は、アルザス＝ロレーヌ、デンマーク、ポーランドその他にたいしてドイツがおこなった併合については口をつぐみながら、フィンランド、ポーランド、ウクライナ、カフカーズなどにたいしてロシアがおこなった「併合」、インド、等々にたいしてイギリスがおこなった「併合にたいしては」頻繁に「たたかっている」。他方では、イギリス、フランス、イタリアおよびロシアのジューデクム派、すなわちハインドマン、ゲード、ヴァンデルヴェルデ、ルノデル、トレーヴェス、プレハーノフ、アクセリロード、チヘイゼー派は、インドにたいするイギリスの、ニースあるいはモロッコにたいするフランスの、トリポリあるいはアルバニアにたいするイタリアの、ポーランド、ウクライナ、その他にたいするロシアの併合には口をつぐみ、そのかわり大多数のものが、ドイツのおこなう「併合にたいしてたたかっている」。

社会排外主義者とカウツキー派のこのような「併合反対闘争」が、徹頭徹尾偽善的なことは明らかであって、ブルジョアジーは、排外主義の宣伝に何百万もの金を支出し、直接にも、社会排外主義者とカウツキー派だけに合法性の独占をゆるして、間接にも、このような闘争を助けている。

アルザス＝ロレーヌをめぐる戦争を弁護しているフランスの「社会主義者」も、アルザス＝ロレーヌのドイツからの分離の自由を要求しないドイツの「社会主義者」も、どんなにそうでないと誓おうとも、ひとしくに併合論者であることは明らかである。「ロシアの崩壊」に反対をとなえたり、あるいはそれを筆にしたり、あるいはだれがポーランドを隷属させるかをめぐる戦争を、「無併合の講和」というスローガンの名のもとに、いま直接あるいは間接に弁護しているロシアの「社会主義者」が、同じような併合論者であることは明らかである、等々。

一二　「併合反対闘争」が空文句あるいは唾棄すべき偽善にならないようにするためには、社会主義者は、第一に、プロレタリアートによる政治権力の獲得と社会主義的変革の遂行をめざす革命的闘争が必要であることを大衆に説明しなければならない。この変革は、帝国主義時代と現在の帝国主義戦争のあらゆる条件から生じてくるのであって、これだけが、いたるところで永続的に民族自決を保障することができる。すなわち被抑圧民族を解放し、暴力にもとづくのではなく、あらゆる民族のプロレタリアートと勤労大衆の同権と同意にもとづいて、諸民族の接近と融合を実現することができる。第二に、公認の社会主義諸党とくに「大」国のそれの隠れた排外主義と併合主義に反対するもっとも広範な宣伝扇動を即刻おこなわなければならない。社会主義者は、大衆に、つぎのように説明しなければならない。いますぐアイルランド、インド等々の分離の自由のためにたたかわないイギリスの社会主義者、フランス植民地の自由のためにたたかわず、アルザス＝ロレーヌの編入をめざす戦争等々に反対してたたかわないフランスの社会主義者、アルザス＝ロレーヌ、デンマーク人、ポーランド人、ベルギー人、セルビア人その他の分離の自由のためにたたかわないドイツの社会主義者、ウクライナ、フィンランドその他の分離の自由のためにたたかわず、ポーランドをめぐる戦争に反対してたたかわないロシアの社会主義者、トリポリ、アルバニア等々の分離の自由のためにたたかわないイタリアの社会主義者、オランダ領インドの分離の自由と独立のためにたたかわないオランダの社会主義者、ポーランド人に抑圧されているユダヤ人とウクライナ人の完全な自由と同権のためにたたかわないポーランドの社会主義者等々は、口先だけの社会主義者、国際主義者であって、実際には排外主義者であり併合論者である、と。

一三　ツィンメルヴァルド宣言と 1916 年 2 月 10 日付のＩ・Ｓ・Ｋの回章(『通報』第三号)から不可避的にでてくる結論は、「戦争にたいする戦争」や「平和のための闘争」も、それが即時の革命的大衆闘争、そのような闘争の宣伝および準備と不可分に結びついていなければ、すべて偽善であるということである。しかし、この結論を率直かつ明確に述べる必要がある。第一に、ヨーロッパ戦争の環境のもとで革命的大衆闘争の発展がなにをもたらすことができ、またもたらさざるをえない（ｍｕβ）かを大衆に説明する必要がある。この発展は、不可避的に帝国主義戦争を社会主義のための内乱へ転化させる。労働者は、他人の事業のためではなく、むしろ自分の事業のために死ななければならないという言葉はみな、このことを暗示している。しかし、暗示だけでは足りない。手近な目標ではないかもしれないとしても、偉大な目標を大衆のまえにはっきりと提示する必要がある。どこへ、なんのためにすすんでゆくかを知る必要がある。第二に、われわれが、「その国の軍事情勢にかかわりなしに」、自国の政府とたたかうよう、大衆に呼びかけるならば、われわれはそれによって、現在の戦争における「祖国擁護」を認める余地を原則的に否認

するばかりでなく、あらゆるブルジョア政府の敗北は、その敗北を革命に転化させるために望ましいということをも認めているのである。そして率直に言わなければならない、――革命的大衆闘争の自覚した代表者たちが、あらゆるブルジョア政府の敗北と打倒のためにたがいに公然と団結しなければ、この闘争は国際的なものにはなりえない、と。第三に、――これがもっとも主要な点であるが――革命的大衆闘争の宣伝、準備、この闘争の進め方と条件の討議をおこなうための非合法組織をいたるところに、上部ばかりでなく、大衆のなかにもつくりあげなければ、このような闘争をおこなうことはできない。ドイツでは街頭デモンストレーションがあり、フランスでは軍事公債の応募拒否を呼びかける前線からの多数の手紙があり、ロシアはいうまでもなく、イギリスで大衆的ストライキがあったとすれば、この闘争を援助するために、この闘争を国際的に結束させるために、自由な、すなわち非合法的な出版物のなかで、この道をすすむ一歩一歩を解明し、成果を点検し、その条件をあらかじめ考慮し、闘争を糾合し、発展させることが無条件に必要である。非合法組織と非合法の出版物がなければ、「大衆行動」の承認は、（まさにスイスでそうであるように）空文句におわるであろう。(1)

（1）　手稿では、第一二項と第一三項は抹消されている。

一四　社会主義者の議会闘争（Aktion）の問題については、ツィンメルヴァルドの決議が、わが党に所属し、シベリア流刑に処せられた五名の社会民主党国会議員に、同情の意を表しているばかりでなく、彼らの戦術に共鳴もしていることを、念頭におかなければならない。大衆の革命的闘争を認めながら、社会主義者が議会内でのもっぱら合法的な、もっぱら改良主義的な活動にとどまるという状態に甘んじることはできない。これは、労働者の正当な不満をよびおこし、彼らを社会民主主義から反議会的な無政府主義あるいはサンディカリズムへはしらせるにすぎない。議会内の社会民主主義者は、議会での演説のためばかりでなく、議会のそとで労働者の非合法組織と革命的闘争に全面的に協力するためにも、自分の地位を利用しなければならないし、大衆自身が、その非合法組織をつうじて、自分たちの指導者のこのような活動を点検しなければならないということを、はっきりと、公然と語らなければならない。

一五　招集される第二回国際社会主義者会議の日程にのぼっている国際社会主義ビューローを招集する問題は、旧来の諸党や第二インタナショナルとの統一が可能であるかどうかという、より基本的で原則的な問題を不可避的に提起する。旧来の諸党や第二インタナショナルを労働運動内のブルジョア政策と同一視しながら（ツィンメルヴァルド宣言と1916 年 2 月 10 日付のＩ・Ｓ・Ｋの回章を参照）、他方では、それとの分裂をおそれ、旧国際社会主義ビューローが招集されしだいＩ・Ｓ・Ｋの解散を約束するという立場の不徹底さと臆病さは、ツィンメルヴァルド連合への共鳴が大衆のなかに広まれば広まるほど、ますます大衆に不可解なものになり、大衆の闘争を発展させるのにいっそう有害となる。

この約束は、ツィンメルヴァルドでさえ表決に付されず、審議もされなかった。

ツィンメルヴァルド会議後にすぎた半年のあいだに、分裂は不可避であり、ツィンメルヴァルド宣言が勧告している活動を古い諸党と統一しながら遂行することは不可能であり、分裂への恐怖心がこの道をすすむのをことごとに阻害しているということは、さらにいっそう明らかになった。ドイツでは、Ｉ・Ｓ・Ｄ〔ドイツ国際主義社会主義者〕の一グループが分裂への恐怖心を非難し、統一をとなえる人々の偽善に公然と反対したばかりで

なく、K・リープクネヒトのもっとも親しい同志である Reichstagsfrakton［国会議員団］の一員オットー・リューレは、公然と分裂に賛成した。しかも、『フォルヴェルツ』は、リューレにたいして、まじめな論拠、誠意ある論拠は一つも持ちだしえなかった。フランスでは、社会党員ブルデロンは、口先では分裂に反対しながら、実際には「C・A・P（Comite Administratif Permanent＝党中央委員会）とG・P（Groupe Parlementaire＝議員団）を」まっこうから「否認する（desapprouve）」決議案を大会に提案した。このような決議が採択されるなら、それが党の即時、無条件の分裂を意味するであろうということは、明らかである。イギリスでは穏健な『レイバー・リーダー』の紙上でさえ、T・ラッセル・ウィリアムズは、分裂の不可避性に公然と、しかも何回となく賛成し、いくたの党員から支持された。アメリカでは、社会党は形式的に統一されているにもかかわらず、ある党員は、軍国主義と戦争（いわゆる preparedness〔待機の態勢〕）に賛成し、社会党の前大統領候補E・デブズをふくむ他の党員は、きたるべき戦争と結びつけて、社会主義のための内乱を公然と説いている。

全世界に、事実上すでに分裂があり、これに目をとじるのは、ツィンメルヴァルド派に害をあたえ、彼らを大衆の物笑いの種にするだけである。彼らがツィンメルヴァルドの主旨に立って活動すれば、その一歩一歩が分裂をつづけ深めることを意味するということを、大衆はりっぱに知っている。

不可避的で、かつ既成の事実であるものを公然と認める勇気をもち、現在の戦争での「祖国擁護派」との統一が可能かもしれないという有害な幻想をすて、「大衆をまよわせている」（1916 年 2 月 10 日付のI・S・Kの回章を参照）、あるいは「大赦」によって社会主義反対の「陰謀」（Pakt）をたくらんでいる指導者の影響を大衆が脱却するのを助けるべきである。

以上が議事日程にかかげられたハーグに国際社会主義ビューローを招集する問題にかんするわれわれの提案である。

＊＊＊＊＊

改良主義的な言辞は、客観的情勢が最大の世界的危機を歴史の日程にのぼせたときに、人民を欺く主要な手段である。この危機は、個々の党の意志にかかわりなく、繰り延べられて、つぎの帝国主義戦争にもちこされるか、さもなければ社会主義革命によって解決されるか、いずれかでしかありえない。帝国主義と現在の帝国主義戦争をみちびきだしたのは、偶然でもなければ、個々の国の個々の政府または資本家の悪意でもなく、ブルジョア的諸関係の発展全体なのである。それと同じように、いないくたの交戦国で、ストライキ、デモンストレーション、その他、大衆的な革命的闘争の現象を生みだしているのは、偶然でもなく、なにかデマゴギーあるいは扇動の結果でもなく、戦争のつくりだした危機と階級的矛盾の激化という客観的条件なのである。

問題は、客観的には、つぎのように、しかもただつぎのように提起されている。この、さしあたりまだ弱い、しかし内的には強力で、深刻な、そして社会主義革命へ発展することのできる、大衆の動揺と運動を助けるか、それとも、ブルジョア政府を援助する政策（Durchhaltspolitik，politique jusquauboutiste〔戦争完遂政策〕）をとるか。民主主義的講和にかんする耳ざわりのよいお談義の現実的意義は、もっぱら、大衆の耳を偽善的におおい、彼らを愚弄することによって政府を援助する点にある。

＊＊＊＊＊

この戦争は、帝国主義の根本問題、すなわち資本主義社会の存立そのものという根本問題を日程にのぼせた。だから、これらの問題は民主主義的に解決できるという考えを、直接または間接に人民におこさせることは、詐欺行為である。ここ数十年間に異常に急速に発展したばかりでなく、――これがとくに重要な点だが――異常に不均等にも発展した資本主義諸国家のあいだの新しい力関係に応じて、世界を分割しなおすことが問題なのである。資本主義的社会関係を基盤としては、世界のこの新たな再分割は、戦争と暴力による以外にはありえない。客観的事態は、成熟した諸矛盾の改良主義的解決を排除しており、一連の帝国主義戦争あるいはプロレタリアートの社会主義革命以外のいっさいの打開の道を排除している。そして、社会主義革命が成功する条件は、まさにこの帝国主義の時代によってすでにつくりだされている。このような条件のもとでの現実的な政治活動は、「自」国のブルジョアジーが他国を略奪するのを助けるか、それとも現に始まろうとしているものを助けるか、二つに一つとしてのみ可能である……[1]。

（1）　ここで手稿は切れている。

第 41 巻『キーンタールにおける第二回国際社会主義者会議』P463～474

1916 年 2 月末～ 3 月に執筆　　手稿によって印刷

1927 年 11 月 6 － 7 日に新聞『プラウダ』第 25 号にはじめて発表